

津ライスニュース

令和元年産水稲 作柄報告(速報版)

令和元年11月11日

津地域農業改良普及センター

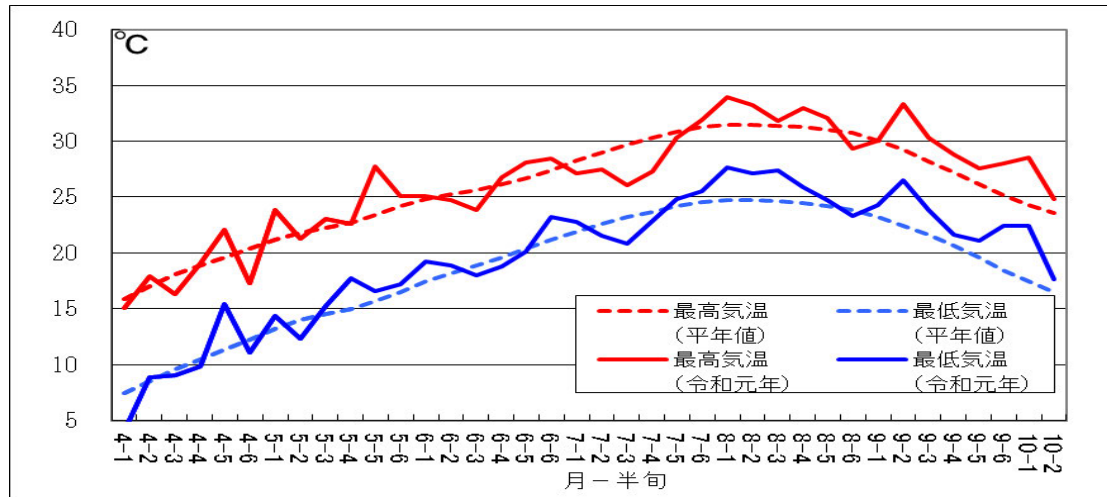
電話:059-223-5103

令和元年産水稲の作柄
作況指数 95 (三重県及び中勢) の「やや不良」

気象経過

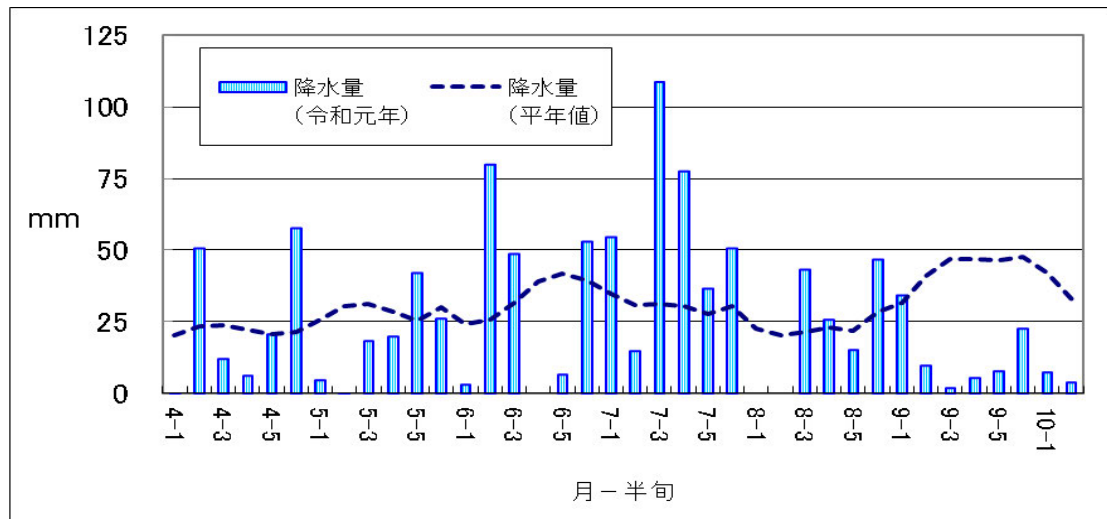
<気温>

4月上旬、5月中旬と最低気温が低い日があり冷え込みましたが、6月中旬以降気温は高く推移しました。しかし、7月に入り天気の不都合な日が続いたため気温は低く推移しました。7月下旬以降、気温は高く推移しています。



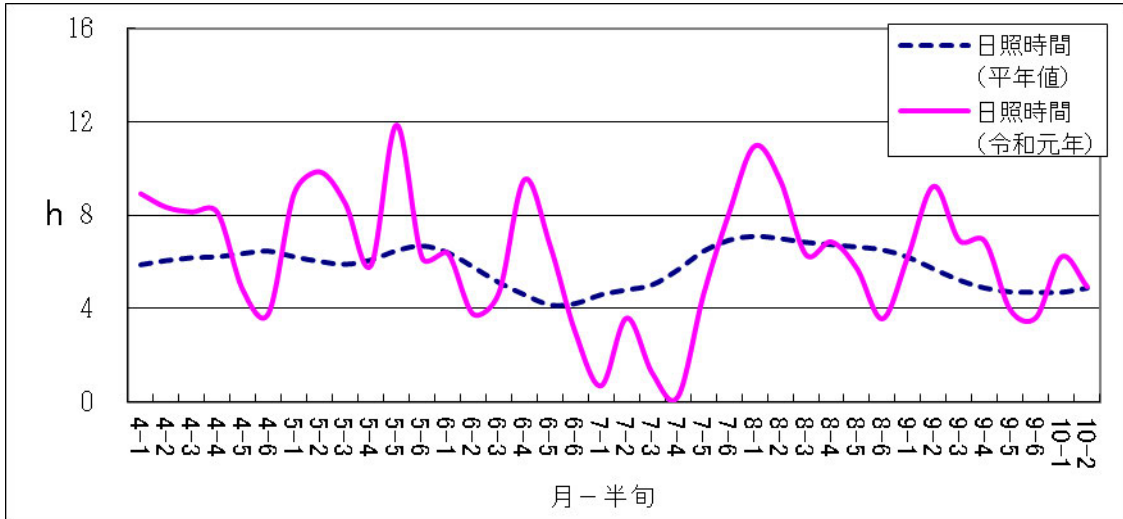
<降水量>

6月までは平年より降水量は少ない状況でしたが、7月に入り降水量は多くなり、梅雨明けも遅くなりました。8月上旬は降雨がなく、その後、平年並みの降雨はありましたが、9月中旬以降、降水量が少ない状況でした。



<日照時間>

5月までは4月下旬を除き晴れた日が多く推移していましたが、6月に入り曇りの日が多くなりました。その後、一時天気は回復しましたが、7月に入り天気のすぐれない日が続いたため、日照時間は少なくなりました。梅雨明け後の8月上旬、9月上中旬は平年を上回りました。



生育経過

<早期栽培の概要>

本年は、育苗期間中の寒暖差が大きく、一部でヤケ等の症状や生育ムラが散見されました。3月～4月上旬にかけて降水量が少なく、代掻き時の用水が心配されましたが、4月10日、30日にまとまった雨が降り、田植え作業は順調に実施されました。

津管内の田植え作業は、早いところで4月10日頃から始まり、概ね4月下旬から5月上旬にかけてピークを迎え、田植作業は順調に行われました。

低温や強風により葉先にダメージを受けているほ場が確認されましたが、気温の上昇に伴い、回復は早く、初期生育は概ね順調でした。

7月の曇天や降雨の影響等によって生育は若干遅めに推移し、農業研究所(嬉野)作況田でのコシヒカリの生育状況は、出穂期は7月18日(平年の出穂期は7月15日)となりました。

7月24日(平年比3日遅い)の梅雨明け後、晴天が続き、降雨は少なく推移しました。そのため、出穂期以降、最高気温、最低気温が平年より高く、日射量が多くなり、生育は回復し、作況試験田において、稈長、穂長は平年並みになりました。

<生育基準田等の調査結果>

農業研究所の作況試験田データで前年と比較すると、穂数はやや多くなりました。また、登熟期間は33日(平年34日)と平年並みでした。

○水稻生育基準田の調査結果

品種	調査地点	移植日	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数		出穂期
					(本/m ²)	(本/株)	
コシヒカリ	殿村	4月18日	91.5	18.1	411.1	27.7	7月20日
	安濃	4月25日	87.9	18.3	302.8	19.6	7月23日
	白山	5月1日	95.6	17.9	349.8	21.6	7月29日

○水稲生育基準田の調査結果(過去の調査データの平均値)

品種	調査地点	移植日	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数		出穂期
					(本/m ²)	(本/株)	
コシヒカリ	殿村	4月21日	90.8	18.9	332.6	27.1	7月18日
	安濃	4月24日	81.2	19.3	247.0	16.2	7月19日

※殿村のデータはH24、H27、H28、H29の平均値

※安濃のデータはH28、H29の平均値

○農業研究所(嬉野)の作況試験田のデータ

品種	年度	移植日	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	出穂期
コシヒカリ	R01	4月25日	84.9	18.5	428.9	7月18日
	平年値(H21~30)		86.8	18.9	403.1	7月15日

<収量・品質の概要>

農業研究所の作況試験田のデータは、一穂粒数、千粒重がやや少なく、平年と比較して収量は37kg 少なくなっています。減収の要因は台風10号による倒伏及びその後の降雨等の影響により登熟が平年を下回ったことが減収の要因と考えられます。

○生育基準田の収量調査結果(R01)

作期	品種	調査地点	わら重 (kg/10a)	精玄米重 (kg/10a)	屑米重 (kg/10a)	千粒重 (g)
早期	コシヒカリ	殿村	584.8	433.6	16.7	20.9
		安濃	690.9	467.3	6.8	21.3
		白山	721.2	525.6	15.5	21.5

※精玄米重 網目1.85mm

○生育基準田の収量調査結果(H30)

作期	品種	調査地点	わら重 (kg/10a)	精玄米重 (kg/10a)	屑米重 (kg/10a)	千粒重 (g)
早期	コシヒカリ	殿村	630.3	437.7	4.5	20.7
		白山	745.5	464.9	10.6	21.8
		安濃	647.0	358.6	10.6	21.4
	三重23号	其村	707.6	515.4	9.0	23.1

※精玄米重 網目1.85mm

○農業研究所(嬉野)の作況試験田のデータ(コシヒカリ)

品種	年	精玄米重 (kg/10a)	屑米重 (kg/10a)	一穂粒数	千粒重 (g)
コシヒカリ	R01	525.2	3.4	73.8	21.5
	平年値(H21~30)	562.3	6.2	75.7	22.6

※精玄米重 網目1.7mm

令和元年産米の農産物検査結果によると、水稻うるち玄米の1等米比率は、県全体では1等 26.4%と昨年(1等 23.2%)と同程度で悪くなりました。

品種別には、作付比率が高いコシヒカリ、キヌヒカリで1等比率が特に低くなりました。2等以下に格付けされた主な理由は、梅雨明けまでの低温・寡照・多雨、台風 10号による倒伏や早刈りの影響などにより充実不足や青未熟粒・死米等の混入となっています。また、白未熟粒、カメムシによる斑点粒、倒伏等による発芽粒・胴割粒の発生も見られています。

ORO1年産米検査等級比率		(R01. 10月末時点)		
品種	1等	2等	3等	規格外
うるち米	26.4	69.7	3.7	0.1
コシヒカリ	19.9	76.4	3.6	0.1
(管内)	19.3	74.8	5.9	0.0
(昨年)	11.8	81.2	7.0	0.0
キヌヒカリ	22.4	72.4	5.0	0.2
みえのゆめ	64.7	35.2	0.0	0.0
三重23号	95.4	2.6	2.0	0.0

<次年度に向けて>

○いもち病・紋枯病

いもち病については、葉色が濃いほ場、日照時間が短いほ場などにおいて発生がみられましたが、穂いもちの発生に至るまでの被害はほとんどありませんでした。しかしながら、次年度以降も引き続き、箱施用剤の使用や、適期防除など効果的な予防防除を行う必要があります。

紋枯病は、収穫間際に上位葉鞘への進展が見られるほ場がありました。紋枯病が発生したほ場では翌年の水稻作でも発生が多くなる傾向があるため、翌年の水稻作では適切な防除も重要となります。紋枯病の病原菌は、ほ場内や近隣のイネ科・カヤツリグサ科雑草で越冬するため、冬季の畦畔雑草防除を行いましょ。

○斑点米カメムシ類

カメムシ類が多発すると、斑点米を発生させ、玄米の品質に大きな影響を及ぼします。ほ場周囲の荒廃地対策や草刈り、農薬の一斉防除などを組み合わせて、カメムシ類の適切な防除を行い、次年度の斑点米発生による玄米品質の低下を防ぎましょ！